

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：12603

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）

研究期間：2018～2023

課題番号：18KK0013

研究課題名（和文）翻訳から見る近世南アジアの文化多元主義

研究課題名（英文）Studies on Cultural Pluralism in Early Modern South Asia: With Special Reference to Translation

研究代表者

太田 信宏（Ota, Nobuhiro）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：40345319

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,800,000円

研究成果の概要（和文）：近世南アジアでは、主にサンスクリット語で書かれた古典的な文芸書や思想書が、ムガル帝国の公の言語であったペルシア語や、様々な地域諸語へと翻訳された。これらの翻訳は、原典に比較的忠実なものから、大きな変化を伴うものまでを含んでいて、近年の翻訳論・翻訳研究で論じられているような広い意味での翻訳と捉えるのが有効である。さまざまな社会＝文化的、政治＝経済的な諸要因が作用するなかで生成された翻訳テキストの解析を通じて、南アジアの多元的文化を動的に把握することが可能となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世南アジアの翻訳とそれが象徴する多元的文化に関する議論は、ムガル帝国のもとでのものを対象とすることが多かったが、ムガル帝国の「辺境」や外部における翻訳に着目する本研究は、南アジア全域をより包括的に捉えた議論に向けた土台作りにも貢献するものと言える。また、サンスクリット語を原典とする地域語文献の述作をあらためて「翻訳」として捉え、ペルシア語への翻訳との比較と連関のなかで捉えようとしたことの意義は大きい。一般的には停滞と宗教的分断の印象が強い南アジア地域について、植民地期近代に先行する近世における動的な文化的交流の実相を具体的に示せたことは社会的にも意義がある。

研究成果の概要（英文）：In early modern South Asia, classical literary and philosophical texts written mainly in Sanskrit were translated into Persian, the official language of the Mughal Empire, and into various vernacular languages. These translations included works that were relatively faithful to the originals, as well as those with major alterations, and can be appropriately understood as translations in the broad sense discussed in recent translation theory and translation studies. Through the analysis of translated texts produced in the context of various socio-cultural and political-economic factors at play, it is possible to gain a dynamic understanding of the pluralistic culture of South Asia.

研究分野：歴史学

キーワード：翻訳 ペルシア語 サンスクリット語 近世南アジア史 ヴァナキュラー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

南アジア地域の特徴のひとつとして文化的多様性・混濁性があるが、そうした文化の多元性をどのように把握するかは、現在の人文学全般が抱える難問のひとつである。ある文化に不変の本質は存在しないと言われ久しいものの、シンクレティズム(習合)概念もまた文化的混生を静的にしか記述しえないという問題をはらんでいる。近年、有効なアプローチとして注目されているのが、翻訳研究からみる文化多元主義の把握である。南アジアでは13世紀までには、サンスクリット語とペルシア語というふたつの普遍的な言語と並んで、地域諸語が様々な文献の述作に用いられるようになった。サンスクリット語で書かれた『マハーバータ』をはじめとする叙事詩や、説話、思想書などの古典的文献がペルシア語・地域諸語に翻訳され、翻訳された文献の伝播は、多元的な南アジア文化の生成に貢献した。異なる言語文化を架橋するかたちで営まれる翻訳という行為に着目することは、文化をそれ自体で完結した一枚岩的ではないもの、「外部」との交流で動的に変容し続けるものとして捉えられる利点を持つ。南アジアの文化多元主義を象徴する翻訳文献については、フランスの社会科学高等研究院のファブリツィオ・スペツィアレ(Fabrizio Speziale)教授を主導者のひとりとして展開する「ペルソ・インディカ(Perso-Indica)」プロジェクトがペルシア語文献・サンスクリット語文献の翻訳を含む分析を通じて、デリー・スルタン朝やムガル帝国のもとでの文化多元主義を明らかにしてきた。しかし、汎地域的なムスリム権力の中心が位置した北インド以外の南アジア諸地域に関しては、ペルシア語翻訳文献の調査・研究は充分に行われているとは言い難い。また、地域語翻訳文献についても、それぞれの地域語文化の一部としての研究は多いものの、これらを改めて翻訳として位置付け、その意味を問う研究は、特に近世期の文献に関しては多くない。近世以来の南アジアの多元的文化は、ペルシア語のみならず地域諸語の翻訳文献によって培われたところが大きいと考えられ、その点でも、北インドで行われたペルシア語への翻訳を対照とするものが突出している研究状況には問題があると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、近世(16~18世紀)南アジアにおける文化多元主義のあり方を、翻訳文献に着目して考察、解明することを目的とした。サンスクリット語を原典とするペルシア語と地域諸語の翻訳文献について調査、分析を行い、特に、ムガル帝国領の「辺境」や外部で成立したもの、地域諸語に翻訳されたものに注目し、翻訳における地域的差異・特徴の有無を検証する。南アジアで成立した、あるいは、南アジアとの関わりが深いペルシア語文献の調査研究を展開するペルソ・インディカのプロジェクト・メンバーと協力し、研究対象文献の言語の違いを超えた国際的な研究連携の発展に向けた足掛かりを作るとともに、近世南アジアにおける翻訳と、それが象徴する言語・宗教の違いを超えた文化的交流と多元的文化の様相について、より包括的で動的な歴史像を提示する。また、20世紀末以降、新たな展開が見られる翻訳論・翻訳研究の手法と概念を参照し、南アジア翻訳文献研究の今後の方途について考察する。

3. 研究の方法

本研究は、サンスクリット語などの古典的文献を直接、間接の原典としてペルシア語や南アジア地域諸語で書かれた文学作品や学術書をはじめとする文献史料の精読と分析に依拠する。これらの文献には未刊行のまま残されているものが少なくないので、インドを中心とする南アジア諸国内外の文書館・図書館において写本の調査とテキストの収集を行う。写本の現地調査は、翻訳文献の伝播と受容に関するテキスト外の情報を提供する場合もあり、重要である。本研究が連携するペルソ・インディカのプロジェクト・メンバーが協力者となって、研究代表者・分担者だけでは困難な各地の文書館・図書館での調査、研究を行う。また、研究分担者一名を、同プロジェクトの拠点であるフランスの社会科学高等研究院に比較的長期間、派遣するなどして、ペルシア語翻訳文献を対象とするものを中心に、史料調査と研究の進め方について、密接に連絡をとる。

4. 研究成果

(1) ペルソ・インディカとの協働によるインド・ペルシア語文献研究の進展

ペルソ・インディカとの協働の成果として第一に挙げられるのが、ムガル帝国第3代皇帝アクバルの廷臣アブル・ファズルがペルシア語で著した同帝国とその統治の要覧である『アーイーネ・アクバリ(アクバル会典)』をテーマとした国際シンポジウムの共催である。同書の成り立ちと内容を多方面から探求するシンポジウムでは、本研究の研究分担者や協力者であるペルソ・インディカのメンバーが報告を行ない、同書が典拠として参照した可能性が高い南アジアのサンスクリット語諸文献と、諸文献に含まれる情報が取捨選択、加工される過程を明らかにした。

国際シンポジウムの成果は、そこで行われた研究分担者や協力者のものを含む報告の一部をもとにした英文論考からなる査読付き学術雑誌の別冊号として出版、公開されている。

ペルソ・インディカでは、南アジアで成立したり、南アジアとの関わりが深いペルシア語文献について、それぞれの著者や概要、写本・刊本の情報などをまとめた記事を同プロジェクト・メンバーを中心とした第一線の研究者が執筆し、オンラインで体系的に整理、公開を行なっている。本研究の協力者となったプロジェクト・メンバーも、それぞれが行った史料調査と研究の成果の一部を活かして、複数の項目を執筆した。これらの記事は、南アジアに関係するペルシア語文献史資料 近世期に成立したものが多く、基礎的データを提供するものであり、近世期を中心とした南アジア、さらには、南アジアを含む広くペルシア語文化圏を対象とした研究の土台となるものである。ペルソ・インディカとの協働により、ペルシア語文化圏との一部としての南アジアを対象とする国際的な研究コミュニティと日本国内の研究者との連携体制を構築し、発展させる基盤を築くことができた。

本研究では、『アーイーネ・アクバリー』以外にも個別のペルシア語文献を取り上げ、その「原典」とされるサンスクリット語文献との比較を行った。サンスクリット語文献を原典としてもつペルシア語文献の述作は「翻訳」として捉えられているが、原典への忠実さを特徴とする狭義の翻訳とは言い難い異同が両者の間に見られることがある。このような翻訳の多様性をテキストに即して具体的に明らかにするとともに、翻訳が行われた目的や社会＝文化的脈絡に着目し、それらと翻訳のあり方との関係について考察した。ペルシア語文献執筆にあたって、サンスクリット語文献などのインドの情報を利用する場合でも、どのような情報を取捨選択し、どのように加工するかは、執筆の状況や目的、想定された読者層の属性によって様々であった。以下の(3)に記すように、近年の翻訳論・翻訳研究では、「翻訳」を広く捉え、多様な翻訳のあり方とそこに作用する社会＝文化的、政治＝経済的諸要因が活発に議論されている。ペルシア語文献述作に見られる原典・情報の改変・加工は、述作の過程に作用した諸要因を解明し、さらには、当時の南アジア社会の多元的文化を動的に把握する手掛かりになると考えられる。

南アジアに関するペルシア語文献研究は、デリー・スルタン朝やムガル帝国など汎地域的な帝國的権力の中心が位置した北インドにおいて成立した文献に関する研究が主流である。本研究では、デカンや南インドでのペルシア語翻訳文献にも着目したが、翻訳のあり方に関して南アジア内の地域的な特徴や傾向性などを見出すには至らなかったものの、最終的な結論を下すにはさらなる研究が必要であろう。南インドで成立したペルシア語翻訳文献としては、カンナダ語圏を中心に18世紀には有力な地域政権に発展したマイル王国で編纂されたカンナダ語王国史書のペルシア語翻訳の研究に着手し、その成果は今後、上記のペルソ・インディカのオンライン記事として、公開することを目指している。古典的、普遍的であるサンスクリット語からは区別される南アジア地域諸語の文献がペルシア語文献との関係で取り上げられる場合、そこで論じられるのはもっぱら、北インドのブラジ・パーシャーやアワード語などの古ヒンディー語の文献であった。また、ペルシア語からベンガル語への翻訳文献について注目すべき研究[Irani 2021]が近年、発表されたが、地域諸語とペルシア語との間の翻訳については未開拓のままの領域が大きく残されているように思われる。本研究が、そうした領域の開拓の契機となることを期したい。

(2) 翻訳的視点からの地域語文献研究

本研究は、サンスクリット語文献のペルシア語翻訳に関する研究と並行しながら、サンスクリット語文献の地域語翻訳に関する研究を行った点を特徴のひとつとする。南アジアの地域諸語による文献は、第1千年紀末から本格的に作成され、内容的に大きくふたつに分けられる。ひとつが、バクティに代表されるようなヒンドゥー教の信仰や実践を、民衆も理解できる平易な言葉で表現する宗教的詩文学であり、もうひとつが、サンスクリット語を中心に、プラークリット語なども含む古典語で書かれた文献に直接的、間接的に基づくもので、そのジャンルは狭義の詩文学(カーヴィヤ)から『マハーバーラタ』・『ラーマヤナ』の「叙事詩」、プレーナ、学術的文献(シャーストラ)まで多岐に及ぶ。古典的文献を原典とする地域語文献の形式や内容、成立の歴史的・社会的背景と意義は、これまでの研究では、「現地語化」の概念・枠組みを用いて論じられることが多かった。「現地語化」論では、それぞれの地域語が用いられる現地社会の価値観や美意識ののちで、古典語で書かれた「原典」が改変される側面に焦点が当てられてきた。本研究では、東インドのベンガル語文献と南インドのカンナダ語文献について検討、分析を行い、近世期においてもサンスクリット語の古典文献を「原典」とする地域語文献の作成が活発であったことを確認する一方で、近世期には「原典」からの改変が顕著な文献と並んで、「原典」の内容を比較的忠実に地域語で書き直した文献も存在することが明らかとなった。特に、カンナダ語圏のマイル王国では、王国指導層の直接的な庇護のもとで、ヴァーサに作者が仮託されているサンスクリット語版『マハーバーラタ』に内容的には非常に忠実な散文カンナダ語文献が作成されたことが注目される。『マハーバーラタ』を「原典」とするカンナダ語文献は、現在に伝わる最古のカンナダ語詩文学作品であるパンパ作『勇敢なるアルジュナの勝利』をはじめとして数多く存在するが、いずれも「原典」からの改変が顕著であった。サンスクリット語の「原典」に忠実であり、なおかつ散文で書かれた文献は先例があまりみられないものであった。

他言語で書かれた文献を「原典」とする述作には、「原典」からの逸脱が顕著な「翻案」から、「原典」に忠実な狭義の「翻訳」まで様々なものがある。近年の翻訳論・翻訳研究ではそうした述作を区分けするのではなく、「翻訳」、あるいは、「書き直し」として大きく括り、個々の「翻

訳」の営みやその産物であるテキストの特徴を解明し、そうした特徴の背景にある社会＝文化的、政治＝経済的な諸要因を探求することに関心を向ける傾向が見られる。「原典」に基づく南アジア地域語文献とその成り立ちを捉える枠組みとして従来の研究で用いられてきた「現地語化」は、「原典」と地域語文献との関係に存在した多様性を把握、記述するうえで充分であるとは言い難い。上述したような広い意味での翻訳と捉えることで、そうした多様性と、翻訳が行われた歴史的状況に作用していた社会＝文化的、政治＝経済的な諸要因の解明に向かうことが可能となるであろう。なお、「翻訳」の用語・概念が、前近代南アジア地域語文献研究であまり用いられていない現状をもたらした要因のひとつとして、以下の(3)で記すように、サンスクリット語を含む南アジアの諸言語に「翻訳」と訳せる語彙が存在しなかったことも考えられる。カンナダ語圏では、他言語の「原典」に基づく述作は、当該原典を「カンナダ語にする」あるいは「カンナダ語で述作する」と表現されることが多かった。こうした「××語にする」などの表現は、カンナダ語以外の南アジア地域語でも用いられていたことが知られている。なお、上記の『マハーバータ』の散文カンナダ語翻訳は、写本では「注釈」と呼ばれている。

サンスクリット語文献を原典とする近世南アジアのペルシア語文献に関する研究では、「翻訳」の用語が一般的に用いられている。「翻訳」と訳せるペルシア語の語彙「タルジュマ」が一般的な史料用語として登場することもその一因と考えられる。ただし、本研究でも、同じサンスクリット語文献のペルシア語翻訳の間に小さくない差異が存在する事例が明らかになったように、翻訳が卓越したひとつの規範にしたがって行われていた可能性は低い。翻訳のあり方の多様性に着目し、翻訳の過程に作用した諸要因を解明することが求められていると言えよう。

本研究は、『マハーバータ』の散文カンナダ語翻訳の事例に着目したが、ムガル皇帝アクバルのもとで『マハーバータ』がペルシア語に翻訳されたことは有名である。また、『マハーバータ』の散文カンナダ語翻訳は「注釈」と呼ばれたが、これは、ヒンドゥー教徒にとっての『マハーバータ』にあたる最重要のイスラーム教文献である『クルアーン』の翻訳が「注釈」と呼ばれたことを想起させる。これらはいずれも興味深い並行的現象と言え、イスラーム的な翻訳の実践が、地方におけるヒンドゥー教徒による地域諸語での翻訳に影響を及ぼした可能性を示唆する。本研究では残念ながら、この並行的現象の背後に影響関係があることを実証するには至らなかった。実証のための手法の開発と並んで、今後の課題である。

(3) 翻訳論・翻訳研究への貢献

近年、翻訳論・翻訳研究が欧米を中心に活発に展開し、新たな研究の視点や目的、分析のための概念や手法が提唱され、翻訳概念そのものが見直されるだけでなく、翻訳論・翻訳研究の課題を再定位しようとするような議論も行われている。いわゆる「記述パラダイム」の登場以降、あるべき翻訳のかたちを探る言語学的なアプローチとは別に、周囲の状況や社会＝文化的、政治＝経済的な諸要因が及ぼす直接、間接の影響のなかで翻訳が実際にどのように行われる(行われた)のかという点への関心が高まり、様々な視角や概念が提唱されてきている。史資料とする過去の文献を特定の時代と地域の脈絡に位置付け、理解することが研究の重要な部分を占める歴史的な諸研究にとっても、こうした新展開を見せる翻訳論・翻訳研究の視角や手法、概念は大いに参考になるものであり、学際的な研究・分析の手法がもつ有効性と可能性が近世の南アジアを対象とする本研究であらためて確認された。

新たな展開が著しい翻訳論・翻訳研究であるが、欧米における事例を主な対象として、欧米社会との関わりが深い研究者を中心とすることは否定できない。インド諸語を含む非欧米諸語の事例を論じたり、非欧米社会との関わりの深い主導的な研究者も存在するが、前者の事例としては植民地期近代以降の英語からの翻訳が、後者が取り上げるのは英語への翻訳が、それぞれ多くを占めている。世界における欧米の文化的覇権が確立する近代よりも前の時代における非欧米諸語間の翻訳は、翻訳論・翻訳研究の関心を惹くには至っていないと言わざるをえない。サンスクリット語文献を原典とする近世地域語文献を翻訳として捉え、近年の翻訳論・翻訳研究の視点や概念を援用して分析する試みも見られるが、その援用のやり方については多くの課題が残されているように思われる。そもそも、翻訳論・翻訳研究の視点や概念は、欧米諸語の事例に主に依拠して構築されてきたものであり、それらが普遍的な有効性をもち、非欧米諸語の事例の研究にそのまま援用できるかは疑問である。近世南アジアの翻訳文献を対象とした本研究から、翻訳論・翻訳研究のさらなる「普遍化」のための検討課題として、ふたつの点が指摘できる。

第一に、サンスクリット語をはじめとする南アジア諸語には、本来的に「翻訳」と訳せる語彙が欠落している。現代では、ペルシア語からの借用語である「タルジュマ」やサンスクリット語起源の「アヌヴァーダ」が「翻訳」の訳語として用いられているが、後者にはもともとは「翻訳」の意味はなかったとされる。これらの語彙が翻訳の意味で南アジア諸語で用いられるようになった時期と過程については、いくつかの地域語の事例をもとにした先行研究もあるが、さらなる研究が必要であろう。カンナダ語では、翻訳の意味でのアヌヴァーダの用例は近代以前に確認できない。その一方で、広い意味での翻訳文学は、前近代カンナダ語文学の重要な部分を構成していた。「翻訳」を直接的に示す語彙が欠落した状況のなかでの翻訳のあり方、翻訳行為を表現す

るために用いられた語彙・語句の検討は、「翻訳」という用語・概念の存在を半ば自明のこととしてきているように見える翻訳論・翻訳研究に新たな視角をもたらすことが期待される。

第二に、南アジアの社会は多言語併用がさまざまな状況・脈絡で常態的であったという点である。歴史的な社会の多くでは多言語が併用されたが、南アジアは併用される言語の数や併用する人々の割合、併用が見られる社会的脈絡の多様さという点で、多言語併用が特に顕著であった社会であるように思われる。多言語併用が常態化した状況のなかで、言語を隔てた情報・知識の格差の解消・低減を少なくとも役割のひとつとしていた翻訳が、どのような役割を果たしていたのかは、翻訳そのものの捉え方の根本的な見直しにもつながる可能性がある重要な今後の検討課題であると言えよう。

< 引用文献 >

Ayesha A. Irani, 2021, *The Muhammad Avatara: Salvation History, Translation, and the Making of Bengali Islam*, Oxford University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 小倉智史	4. 巻 佐川栄治編
2. 論文標題 スラトラーナ攷：神の鎧か西夷の号か	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 《史学会シンポジウム叢書》君主号と歴史世界	6. 最初と最後の頁 93～108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi Ogura	4. 巻 3
2. 論文標題 The Ain-i Akbari and Western Indology: with Special Reference to the Category of the Six Systems of Philosophy	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Asian and African Studies Supplement	6. 最初と最後の頁 127～140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Nobuaki Kondo	4. 巻 3
2. 論文標題 Ain-i Akbari as a Tazkira of Poets	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Asian and African Studies Supplement	6. 最初と最後の頁 93～105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kazuo Sakaki	4. 巻 3
2. 論文標題 The Interpretations of Karma and Rebirth in the Ain-i Akbari and Related Works of Muslim Intellectuals	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Asian and African Studies Supplement	6. 最初と最後の頁 77～91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Arzoumanov Jean	4. 巻 5
2. 論文標題 Persian Garlands of Stars: Islamicate and Indic Astral Sciences in Seventeenth-Century North India	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of South Asian Intellectual History	6. 最初と最後の頁 1~34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/25425552-12340041	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi Ogura and Fabrizio Speziale	4. 巻 3
2. 論文標題 Introduction: Abu-Fazl and Persian Historical Writing in the Multi-cultural Society of Mughal India	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Asian and African Studies Supplement	6. 最初と最後の頁 1~17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 太田信宏	4. 巻 8
2. 論文標題 イギリスを脅かした一八世紀南インドの地域政権	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア人物史	6. 最初と最後の頁 383~445
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi Ogura	4. 巻 1
2. 論文標題 Nurbakhsh, Muhammad	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Encyclopaedia of Islam THREE	6. 最初と最後の頁 139~142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi Ogura	4. 巻 1
2. 論文標題 Nurbakhshiyay	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Encyclopaedia of Islam THREE	6. 最初と最後の頁 142 ~ 146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榊和良	4. 巻 71-2
2. 論文標題 スーフィーの直観知とブラフマンの知	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 印度學仏教學研究	6. 最初と最後の頁 33 ~ 39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fabrizio Speziale	4. 巻 85-3
2. 論文標題 Beyond the "wonders of India" ('aja' ib al-hind): Yogis in Persian medico-alchemical writings in South Asia	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Bulletin of the School of Oriental and African Studies	6. 最初と最後の頁 423 ~ 444
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 近藤信彰	4. 巻 64
2. 論文標題 16・17世紀ペルシア語文化圏における講釈と講釈師	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 オリエント	6. 最初と最後の頁 203 ~ 215
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kiyokazu Okita	4. 巻 30
2. 論文標題 A Genealogy of Divine Paramour: Rupa Gosvami ' Ujjvalanilamani in the History of Sanskrit Dramaturgy and Literary Criticism	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Vaishnava Studies	6. 最初と最後の頁 224 ~ 244
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kiyokazu Okita	4. 巻 29
2. 論文標題 The Theology of the Caitanya Vaisnava Sampradaya: Six Distinctive Features	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Vaishnava Studies	6. 最初と最後の頁 5 ~ 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Okita Kiyokazu	4. 巻 48
2. 論文標題 Rejecting Monism: Dvaita Vedanta ' s Engagement with the Bhagavatapurana	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Indian Philosophy	6. 最初と最後の頁 447 ~ 465
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10781-020-09427-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Okita Kiyokazu	4. 巻 69
2. 論文標題 Slesa Readings on Bhagavatapurana 1.1.1	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Indian and Buddhist Studies	6. 最初と最後の頁 979 ~ 985
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Okita, Kiyokazu	4. 巻 68-3
2. 論文標題 The Authorship of the Commentary on Vopadeva 's Harilila	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Journal of Indian and Buddhist Studies	6. 最初と最後の頁 1107 ~ 1113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4259/ibk.68.3_1107	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ogura, Satoshi	4. 巻 12-2
2. 論文標題 In This Corner of the Entangled Cosmopolises: Political Legitimacies in the Multilingual Society of Sultanate and Early Mughal Kashmir	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Persianate Studies	6. 最初と最後の頁 237 ~ 260
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎和良	4. 巻 85
2. 論文標題 インド・イスラームと佛教：近代化を模索した人々	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本佛教学会年報	6. 最初と最後の頁 79 ~ 105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11501/4417654	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Okita, Kiyokazu	4. 巻 -
2. 論文標題 Divine Transgression: Devotion and Ethics in Bengali Vaisnavism	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Lucian Wong and Ferdinando Sardella (eds.), The Legacy of Vaisnavism in Colonial Bengal	6. 最初と最後の頁 212 ~ 232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Okita, Kiyokazu	4. 巻 -
2. 論文標題 Singing in Protest: Early Modern Hindu-Muslim Encounters in Bengali Hagiographies of Chaitanya	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 John Stratton Hawley et al. (eds.), Bhakti and Power: Debating India's Religion of the Heart	6. 最初と最後の頁 159~170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計40件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 23件)

1. 発表者名 Satoshi Ogura
2. 発表標題 Locating Farmuli's Persian translation of the Laghuyogavasistha
3. 学会等名 Seminaire "Interactions between islamicate and indic societies in South and South-East Asia : comparative perspectives" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Satoshi Ogura
2. 発表標題 Rethinking Suratrana: God's Armor or Yavanas Title
3. 学会等名 Seminaire "Asie du Sud et culture persane (XVIe-XXe siecle). Productions savantes, traductions, interactions" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Satoshi Ogura
2. 発表標題 Working and researching on Pre-Modern South Asia in Contemporary Japan
3. 学会等名 Seminaire "Interdisciplinary uses of notions in the social sciences" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Satoshi Ogura
2. 発表標題 Imperial Historiography and the creation of Persian Scholarship on India: the Ain -i Akbari
3. 学会等名 1st Young Researchers' Perso-Indica Workshop (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Satoshi Ogura
2. 発表標題 How Did Muslims Describe the Indic View of Heaven and Hell?
3. 学会等名 Conference of Heavens and Hells: Life After Death in Religious Traditions from South Asia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 「頑迷固陋なイスラーム君主アウラングゼーブ」という宿痾
3. 学会等名 2023年度 中東 イスラーム教育セミナー (第19回) (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 ミールザー・ハイダルの没年について
3. 学会等名 AA研フォーラム&グローバル地中海地域研究プロジェクト研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Satoshi Ogura
2. 発表標題 Past as a Curse, Future as the Dark: the Islamisation of Nund Rishi in Persian historiography of Kashmir in the Late Eighteenth Century (the Gawhar-i Alam Tuhfatan li-al-Shah Alam of Muhammad Aslam Munimi)
3. 学会等名 Cultural Politics on Secularism and Islam in Kashmir: Reading Lal Ded and Nund Rishi (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Satoshi Ogura
2. 発表標題 Some general characteristics analyzed in the three Persian translations of the Laghuyogavasistha
3. 学会等名 International Workshop “ Translation and Textual Transmission across Languages and Cultures in Early Modern South Asia ” (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Nobuaki Kondo
2. 発表標題 How did the Hamza Romance Develop over Time? An Analysis of the Zubdat al-Rumuz
3. 学会等名 International Conference “ Amir Hamza and Beyond: Historical Narratives and Romances across the Muslim World ” (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kazuyo Sakaki
2. 発表標題 Texts and images: Intercultural transmission of the text related to astral sciences in Deccan
3. 学会等名 International Workshop “ Translation and Textual Transmission across Languages and Cultures in Early Modern South Asia ” (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Kiyokazu Okita
2. 発表標題 The Aesthetic Theories of Devotion in Sanskrit Literature: The Emergence of Bhakti-rasa in Late Medieval India
3. 学会等名 The Department of Sanskrit, University of Calcutta (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kiyokazu Okita
2. 発表標題 When Cowherd Women Speak in Bengali: Transmission and Transformation in Gunaraj Khan's Srikrnavijaya
3. 学会等名 International Workshop "Translation and Textual Transmission across Languages and Cultures in Early Modern South Asia" (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Nobuhiro Ota
2. 発表標題 Translation of the Mahabharata into Kannada prose in the Mysore Kingdom of Early Modern South India
3. 学会等名 International Workshop "Translation and Textual Transmission across Languages and Cultures in Early Modern South Asia" (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 前近代インドにおける一元論とスーフィズム
3. 学会等名 第61回現代中東イスラーム世界・フィールド研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Satoshi Ogura
2. 発表標題 Non-Muslim Heroic Conquerors in Persian Historical Narratives: The Cases of Indic Rulers
3. 学会等名 Der 34. Deutscher Orientalistentag (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 アクバル版Laghuyogavasthaペルシア語訳における翻訳者ファルムリーの思想的立場：サリーム版との比較を中心に
3. 学会等名 インド思想史学会第29回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 スラトラーナ攷：神の鎧か西夷の号か
3. 学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「『記憶』のフィールド・アーカイビング：イスラームがつなぐ共生社会の動態の解明」研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Nobuaki Kondo
2. 発表標題 Interrelations among Various Versions of the Persian Hamzanama
3. 学会等名 13th Biennial Iranian Studies Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 榊和良
2. 発表標題 スーフィーの直観知とブラフマ・ヴィディヤー
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kiyokazu Okita
2. 発表標題 Scholars Won ' t Get It but Devotees Will: A Contested Place of Devotion in the History of Sanskrit Aesthetics
3. 学会等名 Vaishnavism as Fine Literature (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kiyokazu Okita
2. 発表標題 When Krsna is a Villain and Kamsa a Hero: Radha ' s Moral Discourse in Baru Candidasa ' s Srikrnakirtana
3. 学会等名 The 14th International Conference on Early Modern Literatures in North India (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kiyokazu Okita
2. 発表標題 Rethinking Hindu-Muslim Relations: A Critical Religion Approach to the Premodern Hagiographies of Caitanya
3. 学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「『インド世界』の形成：フロンティア地域を視座として」2021年度第2回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ogura Satoshi
2. 発表標題 In Search of Unseen Equivalence: Muhammad Shahabadi 's Translation Strategies
3. 学会等名 フランス社会科学高等研究院マルセイユ・キャンパスUE237 - Interactions between islamicate and indic societies in South and South-East Asia: comparative perspectives
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Okita Kiyokazu
2. 発表標題 Slesa Readings on Bhagavatapurana 1.1.1: Srinatha Cakravarti 's Caitanyamatamanjusa commentary
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第71回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ogura Satoshi
2. 発表標題 Kalhana 's 'Victory' over Rashid al-Din: Contesting Pre-Islamic History of Kashmir during the Jahangir Period
3. 学会等名 AA研共同基礎研究「南アジアにおける文化的接触のダイナミズム」2020年度第1回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ogura Satoshi
2. 発表標題 Various Ways to Liberation: a Comparative Study in the Mughal Persian Translations of the Yogavasistha
3. 学会等名 AAS (Association for Asian Studies) in Asia 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 16世紀カシミールにおけるリシ伝承の展開
3. 学会等名 内陸アジア史学会2020年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 パンジャープ北部土着集団の千年
3. 学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「インド世界」の形成 フロンティア地域を視座として」2020年度第1回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sakaki Kazuyo
2. 発表標題 Modernists Struggling for their Ideal Modernity - Ross Mas 'ud and Japanese Intellectuals
3. 学会等名 AAS (Association for Asian Studies) in Asia 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 置田清和
2. 発表標題 The Authorship of the Commentary on Vopadeva 's Harilila
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Okita, Kiyokazu
2. 発表標題 Who Experiences Bhakti-rasa? The Nature of Devotional Practice according to Jiva Gosvami
3. 学会等名 48th Annual Conference on South Asia (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ogura, Satoshi
2. 発表標題 Review: Part V Early Modernity and Civilizational Apogee (ca. 1453 - 1683)
3. 学会等名 国立民族学博物館 Book Launch Review Roundtable of Wiley Blackwell History of Islam (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 南アジアにおけるサンスクリット古典の翻訳
3. 学会等名 ワークショップ「21世紀の人文知とは：世界の古典学から考える」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田信宏
2. 発表標題 カンナダ語修辞学書『比類のない英雄の行状記』の基礎的研究：近世インドにおける地域語と修辞学
3. 学会等名 2019年度第7回FINDAS研究会「南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kondo, Nobuaki
2. 発表標題 From Prophet 's Companion to the Monotheist Romance Hero: The Hamza-nama in the Global Context
3. 学会等名 Consortium for Asian and African Studies (CAAS) the 10th Symposium "Cultural Expression in the Era of Globalization", (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 榊和良
2. 発表標題 インド・イスラームと佛教：近代化を模索した人々
3. 学会等名 日本佛教学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nobuaki KONDO
2. 発表標題 Ain-i Akbari as a Tazkira of Poets
3. 学会等名 Conference: The Classification of Indic Knowledge at the Mughal Court: the Ain-i Akbari (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoshi OGURA
2. 発表標題 Ain-i Akbari and Western Indology: With Special Reference to the Category of the Six Schools of Philosophy
3. 学会等名 Conference: The Classification of Indic Knowledge at the Mughal Court: the Ain-i Akbari (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuyo SAKAKI
2. 発表標題 The Doctrine of Karma in the Ain-i Akbari
3. 学会等名 Conference: The Classification of Indic Knowledge at the Mughal Court: the Ain-i Akbari (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Kiyokazu Okita (Co-edited with Rembert Lutjeharms)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 278
3. 書名 The Building of Vrndavana: Architecture, Theology, and Practice in an Early Modern Pilgrimage Town	

1. 著者名 Satoshi Ogura and Fabrizio Speciale (Co-editors)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa	5. 総ページ数 141
3. 書名 Journal of Asian and African Studies Supplement, No. 3: Imperial Historiography and the Creation of Persian Scholarship on India: The Ain-i Akbari of Abu al-Fazl (d. 1602)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「ペルソ・インディカ (Perso-Indica)」プロジェクト・ホームページ http://www.perso-indica.net/ 同ホームページ内のペルシア語文献紹介記事 http://www.perso-indica.net/table-of-contents</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	榊 和良 (Sakaki Kazuyo) (00441973)	北海道武蔵女子短期大学・その他部局等・講師 (40124)	
研究分担者	小倉 智史 (Ogura Satoshi) (40768438)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授 (12603)	
研究分担者	置田 清和 (Okita Kiyokazu) (70708627)	上智大学・国際教養学部・准教授 (32621)	
研究分担者	近藤 信彰 (Kondo Nobuaki) (90274993)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授 (12603)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	スペツィアーレ ファブリツィオ (Speziale Fabrizio)		
研究協力者	アルズーマノフ ジャン (Arzoumanov Jean)		
研究協力者	オルトマン エヴァ (Orthmann Eva)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	シャーバズ ペーガー (Shahbaz Pegah)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Translation and Textual Transmission across Languages and Cultures in Early Modern South Asia	開催年 2024年～2024年
国際研究集会 The Classification of Indic Knowledge at the Mughal Court: The Ain-i Akbari	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
フランス	社会科学高等研究院		